読売俳壇

矢島渚男 選

山の分少し残して栗拾ひ　長野県　村田　実

【評】「山の分」がいい。鹿や栗鼠などの具体性よりも漠然がよい。栗も「山」のために働いているのだ。山の栗は柴栗であろう。

スタートの火薬の記憶運動会　宍粟市　宗平　圭司

【評】幼いころ、ピストル音が怖かったが、記憶に蘇るのは火薬の匂い。人類の先祖は暗闇で暮らしていたからか嗅覚の遺伝子が多いようだ。脳の深くに刻み込まれていた。

木簡に鎮兵の文字彼岸花　国分寺市　野々村澄夫

【評】「鎮兵」と書かれた木簡が出土した。木片に書かれた貴重な記録。奈良・平安初期の鎮守府の兵で家族を同伴できた。

名札なき植物園の萱かな　宝塚市　広田　祝世

子が胸に鮭抱く鮭の摑み取り　札幌市　藤林　正則

二十円上がりし時給秋の雲　高砂市　今井　慎一

月の裏知る世となりて今日の月　富山市　小松栄津子

ぽぽの実はすぐに熟れけり秋の蔭　山形県　沼沢さとみ

思ひ出に力をもらふ秋の夜　橋本市　若崎　喬子

夕暮れも好きだと君が言う十月　砺波市　野村真里恵

宇多喜代子 選

虫籠を抜け来る風の匂ひけり　大津市　竹村　哲男

【評】この虫籠の中に虫が居るのか、居ないのか。いずれであっても虫籠を潜り来る風が虫の存在を思わせる。この匂いは秋諸々の匂いだろう。

空仰ぐなんときれいなうろこ雲　西宮市　高崎なほみ

【評】秋空に浮くうろこ雲に対する率直な気持ちが、中七によく出ている。他季の雲にない秋の雲の様子である。

ばらばらに咲いて一面曼珠沙華　秩父市　中島由美子

【評】曼珠沙華の咲いている様子のうかがえる句。一本ずつ見る花と、かたまって咲いている花は別物に見える。ばらばらに咲いてばらばらに見えないところがこの花の特徴。

子の太鼓子の笛唄も秋祭　あきる野市　戸田　幸雄

すぐ転ぶ幼の胡座秋彼岸　東京都　山内　健治

かの世にも生き生きと咲く曼珠沙華　横浜市　鈴木　基之

蜻蛉を目で追ふ立たされ坊主かな　横浜市　小林　千秋

乗り換えのホームに赤きうめもどき　みどり市　大内　稔

津田梅子樋口恵子や天高し　佐野市　高橋すみ子

とびとびも群るるも淋し彼岸花　大竹市　二階堂顕二

正木ゆう子 選

ビギナーズラックそれから蟻地獄　土浦市　小川　智昭

【評】最初褒められたばかりに、ずるずると深入りしてしまった俳句の道。どんなジャンルでも、誰にも覚えのある道筋だろう。ラックと地獄の「ク」の脚韻が、お洒落である。

やっと秋羽あるものは羽繕ひ　東京都　本多　明子

【評】「やっと秋」に誰もが共感。普通の事を普通にできるようになり、鳥までほっとしているよう。開放的なア音・ハ音の多さが、爽やか。

葡萄持たす吾子のこれから逢う人に　松戸市　稲葉　豊美

【評】葡萄となると、相手の親御さんのことまで考慮しての選択ではないだろうか。家族ぐるみの未来が透けて見えるような、幸福な句だ。

老犬の影は狼今日の月　神戸市　増田　嗣夫

おいと呼ぶ夫に振り向く花野かな　松山市　高山　洋子

このかをり白粉花と居た証し　南房総市　山根　徳一

紫蘇の実を夫としごくはあと幾度　東京都　松永　京子

鶏頭のむず痒さうな種を掻く　神戸市　西　和代

ゐのこづちアリバイとしてつけてゆく　鳥取県　表　いさお

鳶の輪にしばらくからみ鷹渡る　津市　中山　道春

小澤實 選

やっぱり秋刀魚細身でも高値でも　春日井市　福代　法子

【評】秋刀魚が不漁で、店頭に並ぶものは、細身で高価なようだ。それでも、秋刀魚を買わざるをえない。秋という季節を味わいたいからだろう。「やっぱり」に本音を感じる。

秋寒や亡き父のすむ夢日記　東大和市　井上　鈴野

【評】夢にひんぱんに出てくる父を夢日記に記録すると、夢に見やすくなるのかも。秋寒という心細い季節、亡き父がさらにさらに恋しい。

秋深し二段ベッドの男子寮　伊勢市　藤田ゆきまち

【評】個室でなく二段ベッドが設置されている男子寮は古いスタイル。秋も深まった。ここに住む二人の若者の間にも、ドラマが生まれそう。

蟋蟀を丸呑み亀に与ふれば　川口市　高橋まさお

文化の日兄ちゃん串カツ買うてんか　埼玉県　八百屋　務

誘蛾灯下の虫を捕りたる袋蜘蛛　桐生市　中村　正人

生ゴミ出すバーの裏口虫時雨　甲府市　村田　一広

ホームランボール花野に消えにけり　村上市　鈴木　正芳

鯛焼や天然物の腹のコゲ　高岡市　池田　典恵

運動会場所取りすでに出遅れし　神戸市　倉本　勉